

2017年度 テクノクラートの聖母 vol.2

目次

☆多様性の「ハーモニー」	いざわ	…4
☆1984年－2017年	いざわ	…6
☆映画評:「インテペンデンス・テイリサージェンス」	TOMO	…8
☆明治大学の策略仮説	マッ●ン	…10
☆中間管理録トネガワ 時代考察	風見賢一	…12
☆火夜	昼 夜	…17
☆書評 ハヤカワの編集者達	柴 犬	…24
☆編集後記・奥付	膜	…26

多様性の「ハーモニー」

いざわ

多様性、という言葉が日本に暮らす私たちの耳に入ってくる機会は、これまでに比べ圧倒的に多くなった。「男と女」の二種だけではない、性の多様性。「変な人」でひとくくりにしな
い、脳の発達の多様性。これまで、分節化されていなかった人の性質を、「ひとつのパターンで考えてはいけない」「多様なものを受け入れられる社会にしよう」とする流れが直接肌で感じられる時代になってきているように思われる。

今の我々が「多様性」という単語を耳にすれば、それに続いて想起されるイメージはおそらく「良い」ものだろう。文明的に発展しているアメリカなどでは、既にセクシャルマイノリティの概念が当たり前のものになっていると言われている。文明的に発展しているアメリカが、多様な人間を受け入れているというのならば、アメリカや西欧の後を追う事で発展してきた日本が発展の先として、多様性の受け入れを目指すのは当然の帰結なのかもしれない。

そんな「良い発展先」として作り上げられた世界の姿の一つ

が、夭折の作家、伊藤計劃の著書『ハーモニー』の世界である。そこは、二十一世紀後半に起きた《大災禍》と呼ばれる世界的大暴動を受け、高度医療技術によって病氣というものが駆逐された世界。痛烈なダメージを受けた人類は、自身の種を保護するためにこれまで以上の保護・慈愛を人類に向けるように発展していった。そしてこの「気遣い」が溢れかえった社会に疑問を感じる「変わり者」の女の子たちがその世界からの脱却のため死を選択しようとして始まる物語である。

「教師の、親の、周囲すべての気遣いが、わたしを静かに窒息させる。」

個人のコミュニティにおける気遣いの圧力というものは昔からも存在していただろう。きつねとためきがプレゼントのお返しを延々と送りあう、『おかえし』という絵本のように、本来利他的に行っていた気遣いという行動が次第に強制圧力を帯び始め、「気遣う」という動作に「気遣い」という気持ちがなくなくなってしまう状況だ。

このように、小さなレベルでの気遣いの応酬が、今度は「多様性の受け入れ」よってより大きなレベルで行われるような方向に世界が進んでいるのではないだろうか。多様性を受け入れる事は恐らく「良い」となるだろう。ひとつのパターンで物事を考えるのではなく、あらゆる状態のものを考慮する「とで

衝突を減らすことができるかもしれない。しかし、その試みが強制的な圧力になるのは「良い」事ではないはずだ。

例えば学校のクラス内に、ある少数的な特徴を持つ子供がいたとする。その子に対し、「特別危害を加える事はしないが、やはり少数派に対し、嫌悪感を持ってしまおう」子供が現れる。その子に対し、「多様性に対する理解を持って」と強いるようなものが多数現れてくるような社会に進んでしまったのなら、その社会の多様性は破綻してしまっている。多様化を完全には受け入れきれない「個性」を持つ子供を変えさせようとしてしまっている時点で、多様性の押し付けによる「一様化」という事がおきてしまっている。多様性は既にその身にこのような矛盾を抱えているのではないだろうか。

『ハーモニー』の世界では、「少数派」の女の子たちが、あらゆるものが一列に並べられ、個々がより透明になり完全な社会的存在達の一部としてふるまう事が強制される。彼女らは、自分達の違和感にある意味自覚的であり、「私と世界」に変化を起こそうと行動を試みる。もしも、多様化圧力の膜が現実の世界をゆっくりと覆っていったのならば、私たちは彼女たちのように、その大きな社会の膜にすっかり気づくことができるのだろうか。伊藤計劃が創り上げた「調和」の先におこるかもしれない世界の姿を、現実の世界の私たちも考えなければならぬかもしれない。



伊藤計劃の長編 SF 小説。2008 年 12 月にハヤカワ SF シリーズ J コレクションの一冊として刊行。第 40 回星雲賞(日本長編部門)および第 30 回日本 SF 大賞受賞。「ベスト SF2009」国内篇第 1 位。2010 年 12 月文庫版が刊行。(Wikipedia より)

一九八四年・二〇一七年

いざわ

ジョージ・オーウェルは『一九八四年』で完成された監視社会を描き出した。このあまりに緻密に構成された世界は現代のわれわれが目当たりすれば、もうそれは間近まで迫っているのではないかと、思わせるほどの細やかさである。実際「最近、現実でもアメリカの監視実態を告白したスノーデンの一件や、日本ではテロ等準備罪なるものまで作られようとしている件などがあり、現代でもこの作品が引きあいに出されることもある。またこの『一九八四年』に限らず、監視社会の未来は多くの作品で作られ、その多くがディストピアとして悲観的に描かれている。それは至極当然のことだろう。誰だってプライベートな部分を不特定の人間にいつとも知れずに垂れ流されたいとは思わずだ。しかし、その反面で、ネット文化の普及によりプライベートの境界線が広がっている事も事実だ。つまり、そこら辺に関して法やルールがほとんど整備されていないのが現状なのだろう。急速に変化する現代を生きる我々は、これからやってくる未来の社会の姿について考え続け、ひとりひとりが真剣にこの問題に取り組まなければならないのかもしれない。

しかし、とは言ったものの今この瞬間にはそんなことは全くどうでもいいのだ。いやむしろぼくはある意味、そんな絶望的な未来を歓迎してさえいるのかもしれない。なぜならぼくは『一九八四年』のウィンストンのように「絶望した世界に生きる男は、めっちゃくちゃかっこいい」と強く感じるからである。何かに対し完全に絶望しきった男、あるいは何かの絶望がゆっくりと首を絞めるように続いている世界に生きる男が登場するような作品に、ぼくはめっちゃくちゃ興奮する。荒廃した都会を一人で（ここが重要）虚ろな目をしながら歩いているような男（『秒速5センチメートル』の彼とか『おやすみプンプン』のあいつとかすごく好き）の事である。今日だって夜の渋谷をポツケに両手をつっこみながら一人でゆっくり歩き、待ちゆく様々な人たちを虚ろな目で眺め、街を俯瞰して観察している自分ひとく興奮していた。こういう雰囲気作品に対し、いやらしく恥ずかしいと感じてしまう部分も確かにある。ただ、それでもやっぱり「絶望男」はかっこいいと感じてしまう。悔しい、でも感じちゃうのだ。きっと誰だって興奮するはずだ、男の子なら誰だって持っているアレだ。絶対持っている。そう断言できるアレ。

『一九八四年』の主人公のウィンストンも同じだ。真理省という機関で働くウィンストンは、毎日狭い部屋で、過去に発効された新聞などを見返し、政府が「嘘をついた」事にならないようにそれらを延々改変していく作業を行う。それに加え、自分の国はど「かよくわからない」ところとずっと戦争しているし、憎むべき相手の動画をひたすら見せ続けられる儀式めいた事をやらなければならないし、

明日も明後日も何もずつとかわらなそうだし。いわゆる「くそったれな」世界で生きていた。「絶望男子」の条件クリア、である。かっこいい。さらにそれに加え、このウィンストンは「絶望男子」のもう一つの条件もクリアしていた。それは、「周りはどうしようもないバカばかりだけど、おれだけは」わかっている『状態』である。一人で歩きながら周りを眺め、この世界は実はこんな仕組みになっているのではないかと一人で悶々と考え、そして自分の中で何かに気づいてしまった時には、それは実は世界にとって最も重要な事なのではないだろうか、と真剣に強く思ってしまう愛すべき状態の事である。自分の中で考えや理解が進んでいったとしても、相対としての絶望的な世界はもっと複雑であり、世界の姿そのものは全く変化していない。「絶望男子」は孤独で、無力なのである。ただ、このウィンストンは「絶望男子」の中でも自意識に溺れるようなタイプではないため、その分ダンディーな色気が醸し出される「ダンディー絶望男子」でもあるのだ。『一九八四年』の緻密で精密な監視社会「ディストピア」は、悲観的な世界のように捉えられる事も当然の事であるが、その反面このような魅力的な男を生きさせる事のできる世界でもある。こんなかっこいい状態になれるのかもしれないのだったら絶望の未来も大歓迎である。ディストピア、万歳。



トマス・モア『ユートピア』、スウィフト『ガリヴァー旅行記』、ザミャーチン『われら』、ハクスリー『素晴らしい新世界』などのディストピア（反ユートピア）小説の系譜を引く作品で、全体主義国家によって分割統治された近未来世界の恐怖を描いている。（Wikipedia より）



映画版『1984』より、ジョン・ハート演じるウィンストンとズンナ・ハミルトン演じるジュリア。

映画評：「インデペンデンス・デイリサージェンス」

TOMO

6月も終わりに近づいた頃、例年通り部誌制作の季節がやってきた。だが私個人としては問題があった。地雷臭香ばしいクソ映画がないのである。もう一度言おう。無いのだ、クソ映画が。というわけで今回は少し真面目に「インデペンデンス・デイリサージェンス」について書いてみることにした。きっかけは昨年の講義で一作目の「インデペンデンス・デイ」を久々に見て面白かったから。ただそれだけである。ちなみにお堅い英米文学専攻の教授の中には本作を「バカみたいな映画」と形容する人もいたが、それがいいんじゃないかと反論しておこう。

ここから先はネタバレし注意。

◆ あらすじ

人類がエイリアンとの壮絶な死闘に勝利を収めてから20年後の2016年7月、エイリアンがアフリカに残した宇宙船が密かに覚醒する。それは地球に仲間を呼び寄せるSOS信号だった。まもなく人類が建造した月面基地を粉碎し、地球にやってきたエイリアンは

想像をはるかに超える進化を遂げ、重力を自在に操ってニューヨーク、ロンドン、パリ、シンガポール、ドバイといった各国の主要都市を次々に破壊する。ESD(地球宇宙防衛)の部長デイビッド、元合衆国大統領ホイットモア、若き戦闘機パイロット、ジェイクらの必死の奮闘も空しく、敵の猛攻撃にさらされて防衛システムを無力化された人類は、瞬く間に滅亡の危機に瀕していくのだった……。

だらだらと書いても仕方ないので結論から書こう。「残念」の一言に尽きる。一作目の良かったところを潰してしまっていたかなという印象。批判一辺倒になってもよくないのでまずは良かった点から。

CGはさすがに迫力満点。当たり前だが前作と比較するとかなり技術的に進歩しているのがわかる。と、とりあえず褒めたところで言いたいことを言っておこう。

武器だ。一番残念だったのは地球側が使用していた武器。20年前の戦いでエイリアンのテクノロジーを吸収して、銃火器も戦闘機もスターオーズか何かで見たような仕上がりになっている。これは違うだろ！前作は実在する戦闘機とエイリアンのドッグファイト、一瞬の気も抜けない戦闘が魅力の一つだった。何を勘違いしたのか、宇宙船除けば同じ土俵に立っているではないか。これでは前作ほど手に汗握るといったことは期待できない。

もう一つ文句をつけたいのがラストの女王との戦闘。全くもって腑に落ちない。エイリアン軍の心臓でもある女王がでしゃばるのも理解できないが、そこにつつまむのは野暮なのかもしれない。しかし、あの戦闘いるのか？巨大怪獣と戦うのならゴリラでも見る事ができる。「インデペンデンス・デイ」で見たいのはそういうものじゃない。宇宙船と戦闘機の戦いを期待していたフシがあった。

最後に「チャイナマナー」に言及したい。ハリウッドがチャイナマネーの影響で中国に媚びているというこの問題。本作でもヒロインの一人に中国人女が抜擢されている。鑑賞中はそれほどでもなかったが、よく考えればこれが最も邪魔な存在だったかもしれないというお話だ。前作を観てもらえればわかるが、これほど堂々と米軍のプロパガンダが許される作品も珍しい。清々しいぐらいだ。だから「そ狂ったシナリオやガバガバ設定が許容されてきた。「USA! USA!」最後にこう叫んでいればこの作品はそれでいい。つまり私の意見としては中国人女どころかアメリカ人以外の人種は基本的に不要。「今こそ人類がひとつに」この設定からして、本作は批判に晒される運命にあったのかもしれない。「こ」でもう一度言っておくが、この映画のシナリオと(特にエイリアンの)ガバ設定は許容してしかるべきだと考えている。

◆あしがき

前作を気に入っていただけに非常に残念だ。気に食わなかった点

は三つほどしか挙げていないが、「こ」のせいで「インデペンデンス・デイ」がそこらへんのSF映画に成り下がってしまった。3作目制作の噂もネット上にあるが、ただのSF映画になるなら観たくはない。一作目の「インデペンデンス・デイ」がなぜウケたのか。ローランド・エメリッヒ監督にはよく考えて欲しいところだ。正直なところ本作程度のSF映画ならそこらへんに転がっているだろう。

批判多目になってしまったので断っておくが、本作は面白くないわけじゃない。あくまで「インデペンデンス・デイ」として観たら不満の方が勝ってしまったというだけの話だ。「続編」というのはそれほど難しいのか。二作目のハードルは想像以上に高いようだ。そう再認識させてくれる映画だった。

出しゃばって
しまった…。
(女王)



明治大学の策略仮説



今回部誌作成にあたり私は明治大学をテーマに、それも世間には公表されていない大学当局の企みの一部を暴くことを目的に考察していく。

まず我々が明治大学の基本的な情報を紹介すると、明治大学のキャンパスは駿河台キャンパス（東京都千代田区神田駿河台）・和泉キャンパス（東京都杉並区永福）・生田キャンパス（神奈川県川崎市多摩区東三田）・中野キャンパス（東京都中野区中野）の４つに別れ、志願者数が私立大学のなかでトップクラスであることや東京六大学の一つに数えられるなど日本でも屈指の有名私立大学である。

そんな明治大学のキャンパスの立地から、大学当局のとある企みが見えてきた。それは「お金がほしい」というものである。大学といえども収入が無ければ運営できない、つまりお金儲けは必須である。そして大学の大きな収入源は学費、受験料、寄付金、そして補助金である。では、どのように受験者数を増やし入学者数を増やし補助金もがっばりいただけようになっているかというところ、国の中枢を守ろうという呪術的な仕組みと明治大学自身で自分を守る仕組みが明治大学の配置にはあるからである。

鉄道や建物などの呪術として有名なものには山手線・中央線くばエクスプレスがある。これは山手線が東京都内に大きな太陰太極図の外円を描き、中央線が内線を描き高尾山からの気を運ぶ、そしてつくばエクスプレスは筑波山からの気を運ぶことで皇居を中核とした山手線内空間の気の流れを円滑にして、皇居を悪い気から守るというもの。また、大江戸線は地下で皇居を中心とした一帯の結果の役割を果たしている。

建物で有名な例は、東京タワー・東京スカイツリー、池袋サンシャインである。これは、この水族館を保有する3つの高い建物の位置を線で結ぶと三角形ができ、その中心には皇居があるというもの。つまり、この配置は皇居を守護するための結果であるということだ。

前置きが長くなってしまったが、明治大学の發揮している呪術において最もわかりやすいのは、文系キャンパスである和泉と駿河台の配置だ。この二つのキャンパスの最寄駅は京王線の明大前駅と新宿線の神保町駅である。この二つの路線は直通運転されており、最終的には高尾山まで通じている。この為、京王線が皇居周辺まで高尾山の気を運んできていることがわかる。その上、明治大学は大学生という若さや力に溢れた若者を大量に山手線外から線内へ移動させる役割を果たし、高尾山の気と相乗効果を發揮して山手線内（皇居周辺）の気の流れを活発化させているのである。事務室の学生への対応も和泉では比較的粗暴に消極的に、駿河台では穏和に積極

的に対応し、「陰」と「陽」の差を意図的に作り学内の気を「コントロールしよう」としている点から見ても大学当局が陰陽道に長けていることがわかる上、「この説を裏付けている。わざわざ学年でキャンパスを変え、学生に移動を強いる理由は国家への忠誠、貢献の意図からだったのだ。そしてここから補助金・寄付金を多くもらいたいという欲望が垣間見えてしまうのは私にだけなのだろうか。

また、なぜ理系キャンパスが生田にあるのか、なぜわざわざ中野に新キャンパスを作ったのか。そこには文系の二〇二〇年生が通う和泉キャンパスを守るという意図が見える。なぜなら、駿河台キャンパス・生田キャンパス・中野キャンパスの場所を線で繋ぐと三角形ができ、その中に和泉キャンパスがある。先述の東京タワー・東京スカイツリー・池袋サンシャインの結果が皇居を守っているのと似た原理で、明治大学は和泉キャンパスを境界で守っているのである。ではなぜ和泉キャンパスを守るのか。それは、和泉キャンパスが受験者数、入学者数が最も多く、一番財政上大切なキャンパスだからである。それゆえ多くの受験料、そして学費を守るため、この境界は作られ機能しているのだ。

今回はこのあたりで企みを暴くことはやめておろが、また機会があれば部誌にて発表していきたい。



参考資料 各キャンパスにより作られた境界図

中間管理録トネガワ 時代考察

風見賢一

はじめに

月間ヤングマガジンに連載されている原作・萩原天晴氏 漫画・橋本智広氏・三好智樹氏による『中間管理録トネガワ』という漫画作品を「存じだろうか。2009年年末に発売された宝島社の「このマンガがすごい!」2017年のオトコ編において一位を受賞した、無個性な部下と横暴な上司(会長)の板挟みになりながら奔走する主人公・利根川幸雄を描いたギャグ作品である。世の働く男性たちの共感を呼び、書店やコンビニで見かけることも多い。

この作品、表向きは利根川の苦勞と葛藤を描いたギャグ漫画なのだが、作中の時間軸を考えると「登場人物は皆、未来人なのでは? または後に来るブームを予言する者たちなのでは?」という考えが浮かんでくる。今回はそのあたりについて考察したい。

『トネガワ』の時間軸

「存知の方も多いと思うが、『トネガワ』は福本伸行氏の大人気ギャグ漫画『カイジ』シリーズのスピンオフである。『カイジ』における利根川は、主人公・伊藤開司の前に極悪非道なディーラーとして

立ちはだかる。そして、カイジとの直接対決の末に敗れ、会長から責任を取らされる形で「焼き土下座」という拷問まがいの刑を受けさせられ失脚した。

『カイジ』の描写を参照すると、最初にカイジがエスポワールに乗り、限定ジャンケンをするのが1996年3月4日とある。そして二回目の借金返済のチャンスとしてスターサイドホテルに行くのが同年7月13日、利根川と「カード」で対決するのは日付が変わって7月14日のことである。ここで利根川は失脚し、公式ファンブックによれば以降は廃人同様になったとされているため、『トネガワ』における時間軸は1996年の3月以前ということがわかる。

作中に登場する未来の道具・フリーズたち

では、『トネガワ』本編を読んでいこう。第一話は巨大金融コンツェルン・帝愛グループの会長である兵藤和尊が世の中の娯楽はどれもこれも似非で退屈なものであると一蹴するところから始まる。その際のセリフでは

「やれ愛だの……恋だの……」「一人じゃないだの……」「会いたいだの……」「やっぱり会いたくないだの……」「結局会いたいだの……」

と歌謡曲の歌詞に文句をつけている。しかし、この辺りは80年代、また歌謡曲全盛期の80年代前半の歌にもよく見られたフリーズなので会長がそれを斬り捨てていても不思議ではない。

問題は次に続くセリフである。

『切りすぎた前髪』だの…… 『タイトなジーンズ』だの……
… 『ねじこむ』だの……」

「切りすぎた前髪」これは歌謡曲の中でも比較的よく聞くフレーズである。調べたところ、このフレーズは平井堅、AKINO、ドリカム、AquaTimez、いきものがかりといった有名なアーティストの楽曲で使われているようである。しかし、この「切りすぎた前髪」というワードが登場するのは2000年代に入ってからなのである。そして極めつけは「タイトなジーンズにねじこむ」という歌詞。もうおわかりだろう。これは2002年リリースの韓国人歌姫の先駆者であるBoAの楽曲「VALENTI」の歌詞である。その年の紅白歌合戦でも歌われた曲の歌詞を90年代半ばで呟いている会長……。第一話にして既に「会長未来人説」が濃厚になってくる。この会長、「カイジ」本編においては来るべき核戦争に備えて極秘の地下シェルターを債務者に建設させているわけだが……。ということは核戦争が起これば貨幣は紙屑と化し、シェルターが必要となる日が本当にやってきてしまうのだろうか……。

そんな会長に債務者たちが命を取り合うようなゲームを企画しろと言われた利根川は早速部下を集め、案を出させる。それを簡条書きにしていくのだが、その中に気になるものがある。「リアル人狼ゲーム」……ん？ 筆者はルールをよく知らないため、詳しいことは省かせていただくが、人狼ゲームは20世紀から存在はしていたものの、2001年にアメリカの会社がゲームに使うカード

を発売したことにより、人気に火がついたという。日本にそのブームがやってくるのは2000年代後半以降である。この案を出した部下が誰なのかは不明だが、部下の中にもルールが詳細に説明でき、利根川に提案できる未来人が存在していた可能性は高いだろう。

結局利根川チームが実行していくのは『カイジ』の最初に登場する「限定ジャンケン」というゲームになるわけであるが、第七話においてそれを考案したのは実は利根川本人ではなく部下の左衛門三郎であるという裏話が明かされる。その際左衛門三郎はパワーポイントを使って自らの案をプレゼンする。パワーポイント……！ また未来の道具が……と思いきや、実はパワーポイントは90年ほど前から存在しており、作中では最新機種であるはずのWindows5にも対応しているということが判明した。当時から既にパワーポイントに関する入門書なども発売されており、左衛門三郎は時代の一步先に最新技術を使いこなすできる男であったことが窺える。

ちなみに一巻の巻末には福本伸行氏本人による書き下ろし作品が収録されている。内容は帝愛グループの新しい紋章を考えると会長に命令されるというものだが、会長自らが考えてきたエンブレムがなんと「あの騒動」の時のものにそっくりだったのだ。作中ではそれに気が付かない会長にどう伝えればいいか迷う利根川や部下たちの葛藤が描かれるが、言わずもがな「あの騒動」が起これたのは2015年であり、90年代半ばにそれを考案していた

会長はただ単にデザイナーの素質があっただけで何の問題もなかったはずである…。

さて、第二巻も会長が世の中の娯楽に苦言を呈するところから始まる。その時のセリフを見てみよう。

「つまらん…… うんざり…… やれ『いいね』だの……」と
「もたち』だの… 『オフ会』だの……」

一巻よりより現代的な発言が多くなっているのがおわかりいただけるだろう。まず、「いいね」とはフェイスブックの記事に他のユーザーが良かった、面白かったとフィードバックをする行為である。「もたち」とはフェイスブックにおいて繋がっているユーザーのことである。フェイスブックをサッカーバグが創業したのは2004年のため、00年代にそのような単語が登場するはずはないのであるが…もしかすると、当時からそのような文化がどこかでは存在していたのであろうか。また、「オフ会」とはインターネットで知り合った者たちが実際に集まる会合のことであるが、これに関しては当時から既にわずかではあるが、そのような文化があったようである。1999年4月に刊行された小説版「金田一少年の事件簿 電脳山荘殺人事件」ではオフ会では初めて顔を合わせた人間が名前や性別を知らないということを利用したトリックが描かれていた。

続きを見ていこう。

「フォローだの… リムーブだの… リツイートだの……」
この3つはツイッターの用語である。ツイッターが開始されたの

は2006年7月、日本語版が開始されたのは2008年4月である。筆者は先輩に勧められ2009年半ばにツイッターを開設した。そして爆発的に日本で流行したのは2010年からである。まあ、福本氏の麻雀漫画『アカギ』でも1965年のはずなのにツイッター発言してたから多少はね？

「ブンブンだの… ハローユーザーだの……」

これはYouTubeの広告収入を生活源とする「ユーザー」の草分け的存在であるエヌAKM氏が動画内で登場するときの口上である。同氏がYouTubeに初めて動画を投稿したのが2007年9月。当時からヒューマンビートボックスをやっていた同氏であるが、登場時の口上が確立されるのは2010年以降である。会長がそれを下らないと斬り捨てている時代には「YouTube」というもの自体が存在していなかったのである。さすが、会長。どこまで未来を予言すれば気が済むのだろうか…。

その後、映画が観たいと言いつつ会長。利根川は「ありのまま」といってどこかで見ることがあるようなパッケージの作品を取り出す。このパッケージは明らかにVHSではないが、そのあたりは置いておこう…。当時もマイナーではあったものの、「D」などデイスク媒体の映画は存在していたはずである。結局、会長が観たのは小惑星探査機を題材にした「HAYOBUSA」というドキュメンタリー映画である…。

そこからはあまり時代考察が必要なさそうなシーンが続き、無事に限定ジャンケンの案が会長に認可される。そこで利根川チ

ームは打ち上げからボーリングという流れになるのだが、問題が起るはその次の第十話である。盛り上がった部下たちは翌日の会議に遅刻し、全員が頭を丸めて利根川のもとに謝罪に訪れる。そこで利根川が一言

「マトリックス……………」

部下たちは何事かと首を傾げる。「マトリックス?」知ってるか…………?」「いや…………」

そこで更に利根川が一言

「バカッ………… 観とけっ…………! マトリックスぐらいつ…………!」

必死に謝る部下たちであるが、観たことがなくても無理はない。キアヌリーブス主演の映画『マトリックス』が公開されたのは「99年代」なのである。このあたりから利根川自身も未来人であるのではないかとという説が浮かび上がってくる。未来の映画を観ておけと怒られる部下たちはたまったものではないだろう。

その後、第三巻はあまり突っ込みどころがないまま進行するが、問題は第四巻冒頭二十四話で起る。利根川が出張に行っている間に、部下の黒服たちの間でファッションブームが起るのである。そこで「このようなセリフが出てくる。

「何故この期におよんで… ベッカムヘア……………」

サッカー選手デビッドベッカムの髪型であるソフトモヒカンを日本中の男性が真似していた時期というのが確かに存在していた。しかし、それは2002年に日韓ワールドカップでベッカムが注目された時なのである。数年後に流行する髪型を「この期におよんで」とあたかも時

代遅れのもののように一蹴するあたり、作中のファッションはかなり進んでいるのだろう。ちなみに90年代半ばのベッカムはブロンドの髪をセンターで分けていた。

まとめ

「ここまで未来の事物が登場すると、もしかすると作中の時間軸は2010年代なのでは…?という疑問が生じてくる。あくまでも90年代というのは『カイジ』における時間軸を基準にしており、『トネガワ』はパラレルワールドなのではないかという考え方である。しかし、この疑問は三十話冒頭で解決する。

「9××年 某日」と書かれている。やはりこの物語の時間は2000年代には入っていないのだ。ますます謎は深まるばかりである…。そして先日発売されたばかりの最新第五巻ではとうとうツイッターやフェイスブックが実際に作中に登場するという事態になってしまっている。その他にも現在も品薄が続いている加熱式たばこ「DOS」(2015年6月発売)やタニタ食堂(2012年1月オープン)の弁当など2010年代のヒット商品が多数出てくる。あーもうめちやくちやだよ。

おわりに

「ここまで」の考察を経て、改めて『中間管理録 トネガワ』に登場する人物は全員が未来人ではないかというのが私の結論である。そうでなければ90年代に「ここまで」20年後の現実社会のブームを予測

できるわけがないからである。よってこの作品は『』作品と定義しても何らおかしくはないのである。

表向きはギャグ作品であるが、時代背景等を考えながら読むことによって、より一層物語を深く、面白く読むことができるのは間違いない。皆さんもそういった漫画の読み方をしてみてもいいかと思うか…。



火葬(前編)

昼夜

村の葬儀は一人の老婆とその孫娘、リラに任されている。旅立ちの丘。

人々からはそんな風に呼ばれている丘で二人きりの火葬は慎ましく行われる。たとえ故人の家族や恋人といえども、火葬に立ち会うことはできない。

しかし今、村の少年カミは火葬場の木陰からリラを見ている。

(リラは魔女なんかじゃない)

カミは胸の中で何度もそう呟いていた。

祖母と二人暮らしのリラは、どこにいても常に無愛想だ。

誰かが野暮ったい村長の声真似をしても笑わないし、どんなに悪口を言われても怒らない。まるで感情などないかのように、常に沈んだ瞳で虚空を見つめている。

そんな性格だから彼女は周囲から浮いていた。

それどころか、祖母もろとも「魔女」なのではないか、という不名誉な陰口を言われてしまっている。

理由は単純で、村ではその二人だけが火葬を行うことができるか

らだ。皆に秘密で、死体を使って何か邪悪な儀式でもしているのではないか？ そんな馬鹿馬鹿しい噂話も、子供の世界では真となりえてしまう。

カミはその悪い噂がどうしても許せなかった。

何故なら、カミだけはリラの素顔を知っていたからだ。

☆

あれは去年のことだ。

カミが森を歩いていると村の不良達にリラが囲まれていた。

いつもは気味悪がられて誰にも相手にされないのに、その日は珍しく標的にされていた。

好奇心が働いたカミは、木陰に隠れてその様子を観察した。

「気持ち悪いんだよ。魔女のくせに」

「……」

リラは口を結んだまま、無表情で不良を見つめている。

「どけよ」

「嫌だ」

そう答えた瞬間、リラの身体は吹っ飛ばされた。しかしリラは尻もちをついても、何度も立ち上がった。殴り返すわけでもなく、何かを言い返すわけでもなく、ただ立ち上がった

(何してんだ、あいつ。早く逃げればいいのに)

一方的な展開に胸糞が悪くなり、目を背けようとした瞬間だった。カミはリラが何故ここまでムキになって立ち向かっていたのか理解した。

リラの背後に弱った狼がいたのだ。

状況から推測するに、不良達があの狼を苛めていたのだ。リラは狼を守るために立ち向かっているに違いない。

カミはリラを見直した。血も涙もなさそうな奴だと思っていたけど、色眼鏡だった。

そうとわかれば。

カミはすーっと息を吸い込んだ。

「守衛さん！……うちに強盗がいます！ 守衛さん！」

幼い頃から音楽をやっていたおかげか、カミの声は雷鳴のように通りが良かった。強盗が現れたなんてもちろんハッターだが、もしかしたら本当に守衛の人が来るかもしれない。

カミは一人ほくそ笑み、迫真の演技を自賛した。

不良たちは目を細めながら、何やらひそひそと話している。

カミは耳をそばだてた。

「……強盗だって？ そりゃ大変だなあ。どうする？」

「俺達で捕まえてやろうぜ！」

「そっだな」

柄の悪い不良たちはそういうや否や、一目散にカミのほうへ駆けてきた。

「え？」

カミは訳が分からず、何度もその目をこすった。何度現実を疑ってみても、目の前の事実は凜然とカミの前に立ちふさがっている。

「おい！ 強盗はどこにいるんだ？ 村一番の嘘つき少年カミくん」

不良の一人は羅刹のように凶悪な歯を覗かせた。

「あ、えっと……南西のほうに逃げたのを見まし——」

「嘘つけ！」

ポコポコにされた。

それからどれくらい経つだろうか。体験したことのないような痛みが目が醒めると、ぼやける視界の中に、丸くて大きい瞳が見えた。

「……」

初めて間近に見るリラは相変わらず口を真一文字に結んでいる。でも、いつもとはどこか違う目をしていた。少し物憂げな表情に見える。

「……大丈夫？」

「あ、え？ うん」

初めて声を聞いた気がする。冷静に考えればそんなはずはないのだが、少なくとも会話をしたのは初めてだった。雰囲気反して意外と高い声だ。

それより思春期的に、今の自分がとても格好悪い状態だということになった。

「いやー、思ったより痛くないわ。これなら明日には治るな、うん」

カミはへっちゃらだと言わんばかりに笑ってみせた。

本当は口の中が痛い。歯がなくなってるんじゃないか？ お母さんになんて言おうか。

「ありがとっ」

「えっ」

「困になってくれたんでしょ？」

リラはそう言うと、手に持っていた白いハンカチで顔を拭いてくれた。湿っていて気持ちがいい。しかし、そのハンカチが朱染みたいに真っ赤になっているのを見てカミは心臓が痛くなった。

「どういたしました。でも、別に困になったわけじゃないんだけど」

カミは苦笑した。

「じゃあどうしてあんなことを？」

「いや、強盗にびびってあいつらが逃げるかなって」

「バレバレだよ。カミのあだ名は『嘘つき』でしょ」

矢のような瞳のリラは、言葉も直球だ。

嘘つき。

それがカミのあだ名だった。自分としては、嘘でもいいから冗談を言っただけを笑わせたいだけなのに。いつの間にか悪いところだけが抽出されてしまった。

最もカミはそこまで気にしていない。

嘘だって、悪いことばかりじゃない。

時には真実よりも優しい嘘というものがあるのだから。なんていうのは都合のいい言い訳だろうか。

「というか、俺の名前知ってたんだ」

「知ってる。私だって、喋らないだけで話を聞いてないわけじゃない」

「そっか。『魔女』だもんな。リラは」

カミの言葉に、リラは少し狼狽えたような顔をした。

魔女と呼ばれていることをどう思っているのだろうか。もし本当は嫌がっていたとしたら、悪いことをしてしまった。

カミは謝ろうかどうか迷い、逡巡した。

「そうね。実際、私は魔女みたいなもの」

リラは諦めたように呟いた。

「えっ？」

「うっん、なんでもない」

リラは細い首を横に振ると、すっと立ち上がった。そして、すぐ隣で佇んでいる狼の背中を撫でた。

「そいつ、どうすんの？」

「連れて帰る。おばあちゃんに治してもらおう」

「連れて帰るって、その巨体を運ぶのは大変だぞ」

見たところ体長一メートル以上はある。とてもじゃないが抱いて運ぶことなどできない。

リラは何も言わずにカミを見つめた。

「……俺に手伝えって？ 嫌だよ。狼なんて暴れるかもわかんないし」

「狼は森の守り神。時には人を襲うこともあるけど、救うこともある。いずれにしろ、人に傷つけられて動けないこの子を見捨てるのは罪よ」

「っ、罪ですか」

そこまで言われるとこのまま帰るわけにも行かなかった。

結局、カミがいったん家に帰って台車を持参することになった。農耕用に使われる大きな台車は重くて、喧嘩後の身体によく響いた。

台車に狼を乗せ、そこからは交代交代でリラの家に向かって運んだ。

その途中、せっかくの機会だからと思い、カミはリラに気になっていたことをたずねてみた。

「なあ、聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なに」

「なんでリラの家だけが村の火葬してるの？」

「……」

リラは黙り込んだ。

やっぱり教えてくれないのだろうか。それとも何か、真実を知った人間は呪いがかけられるとか、そういった禁忌的な問題が絡んでいるから言えないのだろうか。

そう思ったが、即座にリラは喋りはじめた。

「特別な理由なんてない。ただ、私の家はそういうの得意だから」
「は、なんだそれ。火葬に得意とかあるのかよ」

カミはつつい茶化してしまった。

すると、幾分か和らいで見えていたリラの表情が再び沈んだ。

「普通の人には耐えられないと思う。火葬のたびに考えさせられるのよ。人って何のために生きるのになって」

「えっ」

唐突に呟かれたシリアスな話題にカミは面食らった

。人が生きる意味なんて考えたこともない。そんなことを考えるのは暇な哲学者くらいで、少なくとも子供が考えるには早すぎる。

大人みたいに鹿爪らしい問題を、自分と同じ年齢の少女が考えていることに、カミは戸惑った。

「何のためって、そりゃあ……うーん。楽しいことをするためとか？」

「楽しい」とより苦しい「と」のほうがずっと多いじゃない」

「そ、そうかな」

カミは首を傾げた。

首を動かすと、さつき殴られた肩の痛みが疼いた。

戸惑うカミを置き去りにするようにリラは言葉を紡いでいく。

「私ね、思うの。もし本当に天国があるってわかったなら、きっと次の日には多くの人が自殺しちゃうんじゃないかって」

リラは淡々と言った。

「そりゃあないだろ。俺は絶対しないよ。勿体ない」

カミは呆れたように呟いた。

「それはカミが子供だからだよ」

「リラだって子供じゃんか」

「私はもう子供には戻れない」

「意味わかんないこと言うなよ」

そんなやりとりをしているうちに、森を抜けて開けた場所へ出た。

リラの家は「旅立ちの丘」へ続くこの平地にある。

「うわ、でっかい家だなあ」

ぽつりと建てられた木造の家は古く、時の流れを感じさせた。しかし、カミの家よりもずっと大きく広々としている。まるで屋敷みただい。

「こんな大きな家に祖母と二人で住んでいるのか。寂しくないのだろうか。」

カミはなんとなくリラ達の生活に興味を持った。

「……まででいいから」

「うん。わかった」

リラはカミに軽く会釈すると、年季の入った家のドアを叩いた。どうやら鍵が掛かっているらしい。開放しの家が多いこの田舎では珍しい。

少し経つとドアが開き、中からお婆さんが出てきた。それは魔女と呼ぶのはあまりに失礼な、背筋のピンとした貴婦人だった。

今までも何度か見たことはあるけれど、いつも厳かな黒いローブで身を包んでいたから、自然な姿を見るのは初めてだ。

優しそうな雰囲気は漂っている。

「あら、友達？ 珍しい」

お婆さんは嬉しそうに言った。

「……」

リラはバツが悪そうな顔で俯いた。夕焼けに染められていてよくわからないけど、もしかしたら照れているのかもしれない。友達とか、そういう類の言葉が苦手そっだし。

そう思うとカミはリラをからかってみたくなった。

「友達のカミです！ あの、今日はリラと一緒に狼を助けました。気になるのでまた様子を見に来てもいいですか？」

手を挙げてそう言い、カミはリラに向けてウインクをした。

リラは呆然とした顔で口をぽかんと開けている。

あの真一文字に閉ざされていた、鉄の扉よりも重そうな口が丸くなった。

そのことに不思議な感動を覚えた。そして薄々気付いてはいたが、子供らしくしていれば意外と可愛らしい顔をしているということにも驚いた。

「狼？」

お婆さんは視線を下げた。

台車に乗せられた狼は不安そうに辺りを警戒している。

「怪我をしているの。お婆ちゃん、治して」

「あら大変。早速治療しなきゃ。でも、助かるかはわからないよ。私にもできないことはあるからね」

「うん」

カミが二人のやりとりをひとしきり眺めていると、やがてリラが、「またね」と言った。

うん、また。

カミがそう呟いたのは、扉が閉ざされた後だった。

リラがほんの少しだけ笑っていた。

その顔が、まるで太陽に目を眩まされた時みたいに何度も何度もフラッシュバックする。

なんだろう、この感じ。この胸が焦がされるような変な気持ち。

謎めいた感情に頭を占拠されたままカミは家路についた。

その日以降、結局カミがリラの家を訪れることはなかった。たとえ友達になったとしても、他人を家にいれることはできないらしい。ただ、村で二人きりで出会った時に話をしてくれるようにはなった。小さな嘘をついてからかうたびに、リラの無表情が崩れることがカミにとって心地よくてたまらなかった。

そんな日常がしばらく続き、気が付けば一年が経っていた。

後編は[こちら](https://t.co/jpJKPIQen5)のページから

<https://t.co/jpJKPIQen5>

書評 ハヤカワの編集者たち

柴犬

本来SF作品の書評を行うのが「らしい」ものであるという事は理

解している。しかし、ここはあえて作品でも作家でもなく、それらを出版してきた人物に着目したい。前回、幸運にも早川書房に勤めていた風間賢二先生に取材することができたが、それに引き続いて早川書房の編集者たちの回想録を読んでいく。一九四五年、戦争が終わった年に産声を上げた一風変わった出版社がいかんにして発展したか、仕掛け人であった編集者たちの著書を通して学ぶことで、よりSFを親しみ楽しむ契機になるのではないかと考える。



翻訳出版編集後記 ▼常盤新平 幻戯書房 二〇一六年

六十年代に早川書房に勤め、その後直木賞を受賞した作家としても名高い常盤新平氏の編集後記である。二〇一六年に出版されたばかりの本であるが、内容は一九七八年から二年間『出版ニュース』上での連載をまとめたものである。海外の作品を取り扱う翻訳出版社として地位を確固たるものにし始めた六十年代。出版社が、そして日本が貧しかった時代にどのように翻訳出版という世界を切り開いたのか振り返った作品である。

常盤新平氏は本書籍で述べているようにSFをそれほど好んだ人間ではない。早川書房での業務は専らミステリーとノンフィクションが専門であり、最終的にSF以外の統括編集長となった経歴の持ち主である。しかし、彼を早川書房に招き入れた人物はほかでもない福島正美氏であり、SFがブームになる前の早川書房内の雰囲気を知る作品としては最も優れたものといえる。海外作品を扱う上での情報収集、エージェントとの交渉、都筑道夫氏や宮田昇氏・福島正美氏といった先輩編集者から教えられた翻訳の技、黎明期という時代を感じさせる一冊である。

余談ではあるが、明治大学の本校舎(駿河台キャンパス)が構える駿河台・神保町は小中大の出版社が軒を連ねる「出版の町」としても有名である。なぜこのような話をしたか、という事であるが、その明治大学の裏手には「山の上ホテル」という古いホテルがあり、過去多くの編集者が作家たちを「缶詰」にした歴史を持っている(今も利用されている)。常盤新平氏はとくにこの「山の上ホテル」に愛着を持っており、『翻訳出版編集後記』でも度々取り上げていた。そし

て『山の上ホテル物語』という創業以来の歴史を関係者のインタビューと共に綴った作品も残しているので、興味がある方に一読してもらいたいと思った故紹介させてもらった。



新版戦後翻訳風雲録 宮田昇 みすず書房 二〇〇七年

著者宮田昇氏が早川書房に勤めていたのは五〇年代であり、常盤新平氏よりも一つ上の世代である。彼は早川書房を退職した後、海外作品の版權管理・交渉を行うエージェントとなった。それゆえ、早川書房のみならず翻訳出版業界全体に関わり、編集者・翻訳家・作家・エージェント様々な交流を持つ事となった。本書は、そんな彼が残す翻訳出版業界の中でも強烈な印象を残す人物たちのエピソード録である。注目すべきは、福島正美が早川書房を退職する契機になった『覆面座談会事件』について事件の事柄のみならず、その後の影響についても記述している点である。ハヤカワSFを築いた福島正美の始まりから終わりまでとは言えないが、要点を絞って業界人から見た像はSFファン必見である。

編集後記 膜

テクノクラートの聖母 vol.2 の編集を担当させていただいた膜です。

編集をするのは今回が初めてなんですけど…。まあ、色々あって大変でした。

でも、たくさんの方々が力を貸してくださったおかげで何とか完成させることができました。本当に感謝に堪えません。

稚拙な編集ではありますが、本文自体は寄稿してくださった方々の力作ですので、お楽しみいただけたと思います。

では、テクノクラートの聖母を今後ともごひいきに！

ありがとうございました。

奥付

テクノクラートの聖母 vol.2

発行：明治大学SF研究会

発行日：2017年8月13日(コミックマーケット92)

印刷：株式会社 くりえい社

